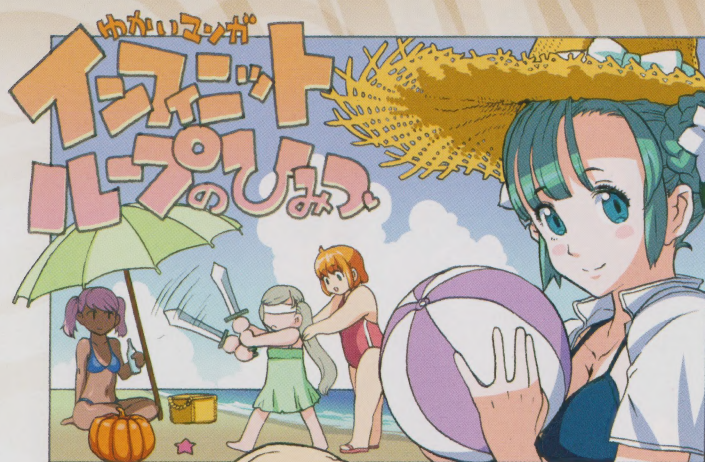
Infiniteloop Rarebook

インフィニットループ レアブック

古き堅牢な城を中心とした辺境の国『リゼーブルグ王国』――
国王が崩御した後、突然死する流行り病が城内外に蔓延していた。
若き王子・ウィリアムは原因の調査に立ち上がるが、手がかりは全く得られない。
そして、王位継承の儀の前夜。
ウィリアムは突如現れた死神の眼を見て、その尊い命を落とすのだった……

気が付くと王子は幽霊となって、自分の遺体を見下ろしていた。
そこに訪れたメイドの背中に王子は図らずも憑依してしまうことになる。
流行り病の原因は死神であったことが、幽霊になって初めて理解できた王子。
「現世にとどまった事に何か意味があるのかもしれない」
王子は己の死後の状況をメイドの背後から見て回ることにするのだった。

その先に、悲劇の円環（ループ）が待つとも知らずに……

続きは15ページへ!!

■デザイナーコメント

とにかく時間が無い状態での作画でしたので、ひやひやしました。
全員を描くのは難しかったので、
綺麗どころとキャラが立っている人達を配置してまとめましたが、
試した事の無い、CGでポスターカラーを再現する様な塗り方だったので、
上手くいったかどうか心配です。

■デザイナーコメント

ゲーマガ誌上には名物コーナーの「あきまん堂」というイラストコラムがあるのですが、
大変けしからんムチムチさで毎回楽しみにしていたのです。
自分も若輩ながら負けずにムッチムチにしようと思いました。
この塗り方も三回目だったので、随分と早くなり、三日くらいで納品。
この絵のセレスが描いた中で一番可愛いというのは、いくらなんでもキャラ慣れが遅すぎ。

ウィリアム

リゼーブルグ王国の皇太子。20歳　愛称はウィル。
父王が死に、王位を継ぐところだった。
父王からの直系の王族は、ウィリアムとヴィーネのみである。
正義感が強く、人望も厚い。
流行り病の調査に乗り出し、婚儀の前日に死神と遭遇して命を落としてしまう。

■デザイナーコメント

誰からも好かれているという、男の身からすると大変いけすかない人です。
キャラの個性が薄くなりそうだったので、
険しい顔より笑顔が似合うタイプにしました。

モチーフ：クラゲ

セレスティア / CV:松岡 由貴

隣国の姫君。17歳　愛称はセレス。
少し気弱な性格である。
自国には、老いた父王と皇太子である弟がいる。
ウィリアムの婚約者であり、彼を心から慕っている。
乙女らしい外見だが、カエルを平気で手づかみできるなど、意外な一面もある。

■デザイナーコメント

念願の『緑髪お姫様』を出せると張り切りました。
典型的なお姫様服はNGとのことだったのですが、
史実風のデザインはコルセットが痛々しいので、
新古典主義のシルエットから創作。キャラが定まらず、
アニメパターンではあんまり可愛く描いてあげられなかった…。

モチーフ：白百合

ヴィーネ / CV:真堂 圭

リゼーブルグ王国の姫君。本名はヴァネッサ。9歳。
お兄ちゃん子であり、婚約者のセレスティアが気に入らない。
遊びたい盛りで、興味はもっぱら大人の男女の話。
時々「早く背が伸びる薬」や過激な情事の本などを購入し、
メイドのアイシャに没収されている。
まだ、おねしょが治らない。

■デザイナーコメント

ヴィーネは、げっ歯類的な女の子を
オランダ民族衣装系の服に包んでまとめました。
アニメでも、動かす手間はともかく、動きでは悩まずすみました。
やっぱり描き慣れたツリ目は楽ですね。

モチーフ：ネズミ

ネルズ / CV:麻生 敬太郎

宰相の地位を持ち、先王の時代から政治を任せられている。
爵位は男爵。58歳。
ネルズもまたこの歳まで独身である。
騎士としての功績もあった。
賢く、政敵には容赦ない。

■デザイナーコメント

「アラブトルコ系のリシュリュー」を出せないかと考えてデザイン。
リシュリュー枢機卿の様に、民衆に理解されない崇高無私の人
というイメージはゲーム中とも合致。
服装は豪華にですが実は海賊ファッション。
似合っているのでまあいいか。

モチーフ：リシュリュー枢機卿

グラント / CV:吉川 裕朗

王城近くの小さな領地を収めている貴族。30歳。この年齢でまだ独身。
爵位は公爵。
財力が乏しく、そろそろ貴族としてやっていけないかもしれない。
先王の時代、若くも王に気に入られ、発言力があった。

■デザイナーコメント

このタイプの男性は描いた事が無く、
ギリギリまで納得いくものが出せませんでした。
衣装に統一イメージが無いのも
顔が固まらないのもその所為でしょうか。

モチーフ：嫌味な家庭教師

ペリテ / CV:窪田 吾朗

政治と距離を置いている王国の司祭。73歳。
昨今のこの国の状況や、王子の死も、神からの試練と考えている。
多くの人が彼に相談に来る。
また、司祭のくせに怖がりの一面もある。

■デザイナーコメント

当時の司祭服を参考にしながら、
司祭というよりも
裁判官のイメージで服を考えていきました。

モチーフ：某アフリカ系アメリカ人男優

アイシャ / CV:荒井 静香

王城に仕えるメイド。18歳。
主に城に住む王族たちの世話係である。心優しく、気立てもいい。
ちょっと食いしん坊なところもあり、
王族たちが残した食事をこっそり少しだけ頂いていたりする。
ウィリアムの遺体を最初に発見する人物でもある。

■デザイナーコメント

マール王国シリーズからの太目少女の流れを復活させたかったので。
ラフの縦縞バージョンは看護婦っぽいのとアニメで動かすのが困難な為、
決定稿では消しています。

モチーフ：鏡餅

メアリ / CV:香坂 夏希

王子との玉の輿が夢だったが、婚約者が現れて王子は諦めた。
が、玉の輿は諦めていない様子。別の職を探そうと思っていたが、
流行り病の騒動でメイドが減って忙しくなり、逃げ遅れた人。
アイシャを残していなくなることが出来ない、義理堅い一面もある。
本人は頭脳派のつもりだが、失敗も多い。
主に宰相や来賓の対応を担当している。

■デザイナーコメント

ラフでは一旦ふくよかになりましたが決定稿では痩せの巨乳に。
アニメ付けはパーツのレイヤー数が多く、
前後関係も複雑で最も大変でしたが、
ヴィーネ以上に良く動いてくれました。
こういうきっつい目の娘さんは描きなれてたので苦労しませんでした。

モチーフ：ミルクチョコレート

ジミー / CV:里見 圭一郎

本名はジェイムズ。31歳。
小さい頃から城の周りの仕事をしており、王族に仕えることを信念としている。
学はあまり無い。
王国の一大事、ヴィーネやセレスティアのためならば命を捨てられると思っている。
その性格が仇となり、ネルズに良いように扱われるところがある。

■デザイナーコメント

威勢の良い体育会系お兄ちゃん。
鎧を描かないで軍服を表現するのが、自分の未熟さからか
どうしても上手くいかなかったので、
鎧を着せるのを許してもらいました。
おかげでアニメは擬似多関節という地獄を見るはめになりました。

モチーフ：昔の少女漫画に出てくる三枚目の暴走族

ルケス / CV:川村 拓央

商売敵が消えた王国の現状をチャンスと考えるチャレンジャー。44歳。
王国の現状は良くないが、流行り病など噂に過ぎないと決め付け、
事件がひと段落したときには、王国の商い窓口を全て掌握しようと動いている。
仕事一筋で家族に逃げられている。嫁と一人娘がいたが、
仕事が終わったら、もう一度会いに行こうと考えている。

■デザイナーコメント

ルケスは面積が広めで、限られた常駐容量を意識して
動かすのは大変でしたが、上手く狼狽してくれたと思います。
頭の上のは帽子ではなく銭受けで、喜ぶとこちらに向けて
小銭を要求する…予定でしたが、アニメ付け段階で没になりました。
奥さんはゲーム中一番の美人かも。

モチーフ：トルコ商人

ドレン / CV:藤本 隆行
10年以上地下牢に閉じ込められて、忘れ去られていた。52歳。
宰相ネルズの政敵であり、彼に負けた経緯がある。
長い月日によって、恨みがつのっている。処刑されたと思われていたが、生き残っていた。
自身に何が起きたのかは語ろうとしない。牢獄の日々が彼の口を閉ざしてしまっている。
デザイナーコメント
ドレンの首の鎖が最も大変で、当初は50枚程のレイヤーを駆使して
擬似多関節アニメをシーケンスごとに付けていました。
それのスクリーンショットをシーケンスごとに撮って、
切り抜いて最適化しました。
ドレン自身のアニメは裸なのでギクシャクしているんですが、
大きく動かす物を入れてバランスをとってみました。
モチーフ：黒豹
タチアナ / CV:長島 伸子
先王の時代から、王城内の隅に占い小屋を許され、住んでいる。年齢不詳。
少しばかり世捨て人な性質がある。
家族はもう居ないらしい。
デザイナーコメント
単に「皺を足した女の子」ってのだけは避けようとしました。
身長もラフ段階でもまだ高かったのでさらに小さく。
老いが哀れに感じられない様に努めました。
全身ローブにするとあまりに緩いので、
上半身だけ気持ちコンサバティブなチョッキ着用。
モチーフ：チェシャ猫

ヴィーネ読書

■デザイナーコメント

「読んで娘」って知ってるかい?
…知らないなら…まぁ良いや。
これは名付けるならば「読んでる娘」かしら。
どうも上手くいかなくて、三白眼を5回くらい描き直した記憶のある絵です。

王子死亡

■デザイナーコメント

王子、脱力しきってないのでこれじゃ生きてますね。
この絵に限った事ではないのですが、ADVのイベント画は、
同時に数種の演技が進行している事を求められるので、
こういった寝そべっている人と立っている人を劇的に画面内に収めるのは難しいなぁ。

セレス介抱

■デザイナーコメント

セレスがかなり幸せだった時のイラストですね。
過去のシーンは極力服装替えを入れていますが、
こちらの絵もセレスの赤い寝巻きだと画面がきつうくなり過ぎてしまうと考え白色に。
セレスの顔はここいらで一回崩したかったので、可愛らしくもマヌケな感じにしてます。

馬車内の王子

■デザイナーコメント

王子の中性的なボディラインも出したいな～と思い、服装を考えました。
しかしデモではバストアップとの服装食い違いが！もう少し演出を考えて描けば良かった…。
ジミーは忠犬っぽく。あと、いまだに馬車の構造が解りません。
板バネをどうやって固定してるんだろう…資料欲しい…。

お姫様だっこ

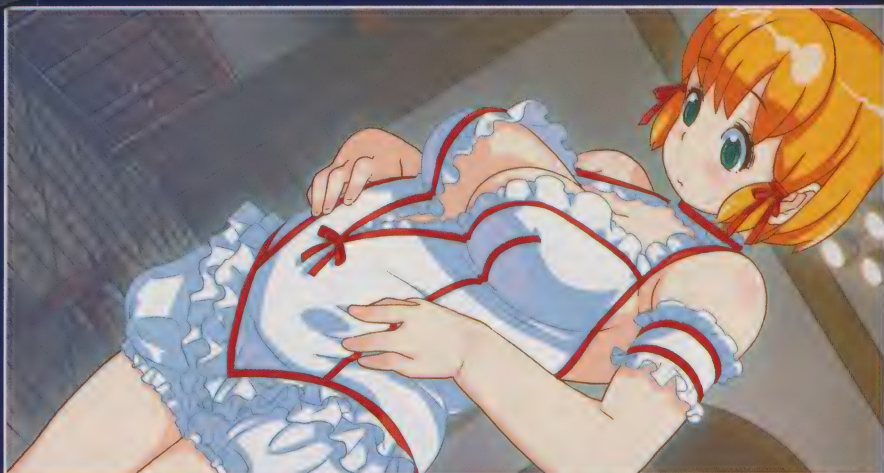
■デザイナーコメント

ヴィーネの小悪魔的な印象を強めたかったので、
恐々とドロワーズ丸出しを描いてみました。
その点で靴下はお色気チェックが入らないから、
どんだけでも描き込めるので楽だなぁ。少女の香りと体重を感じて欲しいです。

ヴィーネ・セレス入浴

■デザイナーコメント

セレスの顔の描き方はこれで良いのかも…と気付いた頃の絵です。
結構末期だったので、セレスには申し訳ない。
そもそも昔は入浴を「不潔」な行為としてたらしいので、
お風呂が昔っぽくないとか言わないでほすぃぃ…。

おニューの寝巻き

■デザイナーコメント

ヒーローロボットは新機種乗り換え後、白くなるの法則。
太ましいボディスーツはともかくとして、
髪につけたリボンは、寝巻きとは関係無いんじゃないかな。
開発中は、おやつ食いアニメをエンドレスにして眺めてました。…癒される〜。

コルセットでこける

■デザイナーコメント

ストッキングは下着じゃなくて靴下でしょ？
という訳でガーターストッキングをかなり細かく描く事が出来ました。
メアリは描き易かったですが背景を新規で描き起こす余裕が無かったため、
パースがとんでもない事に…。

ひみつ その④
出た！死神だ！！
死神と出会うと王子の体力はぐんぐん減っていくのだ！
ぞくっ
これは皆さん お揃いで！
HP20
・・・
HP9
・・・
HP2
・・・
じゃあ 仕事があるから…
死神がその場を離れるまでは王子は人物移動をする事が出来ないぞ！
あ…そうそう 言い忘れたけど…
HP0
あ
ひみつ その⑤
失敗すると…時間は戻り初日からやり直しだ！
アイシャさん メアリさん よろしいかしら？

1ページの続きだよ!

「ウィル様」：ウィリアム王子の愛称

漫画はこちらから読んで下さい ● ▶

インフィニットループRadio　出張特別版

2008年6月13日（金）より、
インターネットラジオステーション<音泉>
（http://www.onsen.ag/）にて、
WEBラジオ『インフィニットループRadio』
を隔週全5回で配信いたしました。
パーソナリティにセレスティア役の松岡由貴さんと
ヴィーネ役の真堂圭さんを迎え、
毎回楽しいトークとゲーム情報をお届けしています。

そして、この「インフィニットループ　レアブック」では、
配信されていない
“幻の未放送特別編インターネットラジオCD”
を巻末に付けさせていただきました。
ゲームを予約してご購入いただいたお客様のみが
楽しめるレアなCDですので、ぜひお楽しみください！

（CDを聴けば、右にあるイラストの謎が明らかに!?）

▲真堂 圭　画

▲松岡由貴　画

■インフィニットループRadio 配信日

第1回配信	2008年6月13日(金) ～ 2008年6月26日(木)
第2回配信	2008年6月27日(金) ～ 2008年7月10日(木)
第3回配信	2008年7月11日(金) ～ 2008年7月24日(木)
第4回配信	2008年7月25日(金) ～ 2008年8月07日(木)
第5回配信	2008年8月08日(金) ～ 2008年8月21日(木)

■プロフィール　代表作（敬称略）

■真堂 圭

機動戦士ガンダム00	王留美役
一騎当千 Dragon destiny	劉備玄徳役
夢使い	三島燐子役
スピードグラファー	天王洲神楽役

■松岡由貴

BLEACH	井上織姫役
おジャ魔女どれみシリーズ	妹尾あいこ役
ネギま！？	エヴァンジェリンAKマクダウェル役
涼宮ハルヒの憂鬱	鶴屋さん役

特別インタビューのコーナー

巻末に添付されている「インフィニットループRadio（特別編）CD」
のパーソナリティとしてご出演いただきました松岡由貴さん（セレスティア役）と真堂圭さん（ヴィーネ役）のお二人に、
直撃インタビューを試みました！
インターネットラジオを収録して、どのような感想を持たれたのでしょうか!?

Q1. 『インフィニットループRadio』を収録してきての感想を教えてください。

A1.松岡由貴さん

すごく楽しく収録させていただいています。
最初は一体どうなるんだろうと
ドキドキしながら始めたんですけども、
徐々に二人の息も合って……きているのか、きていないのか（笑）
でも、（真堂ちゃんは）気持ちよくボケてくれるので、
その辺はツッコミとして快くスパスパと突っ込んでいます。

A1.真堂圭さん

全てセレスティア様にお任せしたヴィーネでございます（笑）
本当にテンポよく楽しくできました。
（松岡さんに）おんぶに抱っこについでに
肩車までしてもらった感じです（笑）
あと、ゲームでは久しぶりに絵も描けたりして、面白かったです。

Q2. 『インフィニットループRadio』（特別編）での聞き所を教えてください。

A2.松岡由貴さん

聞き所……そうですねぇ、
（真堂ちゃんが）広島が中部って言うくだりですかね（笑）
真堂圭ちゃんの魅惑のボケっぷりが
ところどころに輝いているので、
お聞き逃しのないように！
わたしと一緒に皆さんも突っ込んでいただきたいなと思います。

A2.真堂圭さん

すばらしい運びのラジオのテンポと言いますか、
一生懸命やったことは
是非皆様わかっていただきたいなと思います。
皆さんも一緒に考えてください……都道府県（笑）
結構勉強になる番組なんじゃないかなと思いますよ。

Q3. 演じられたキャラの特徴とご自身とのギャップ（もしくは似たところ）を教えてください。

A3.松岡由貴さん

いやもう見事なまでに似たところが全然ないですね（笑）。
でも、あたしは子役からこの業界に入ってきたんですけど、
こういう仕事を始める前の9歳くらいまでは
人見知り時代というか、
超内気でお母さんの後ろから離れない子どもでした。
なので、その頃はセレスティアのような
“ほわぁ～”っとしたお嬢ちゃんだったと思いますね。

A3.真堂圭さん

わたしもヴィーネみたいに、
すごくハキハキした子どもでもなかったですね。
今もそうなんですけど、
どっちかというと内に入った子だったので、全然似ていないかな？
でも、（お兄ちゃん子のヴィーネのように）
独占欲が強いところは似ているかもしれません。
わたしもお姉ちゃん大好きなので。
もちろん、おねしょも9歳ではしなかったです（笑）

Q4. 最後に「インフィニットループ ～古城が見せた夢～」をお買い上げいただいたお客様にメッセージをお願いします。

A4.松岡由貴さん

こんなにしおらしいお姫様を演じさせていただけるのは、
とっても珍しいと思うので、是非、
松岡由貴の珍しい一役として
楽しんでいただけたらと思います。
お買い上げありがとうございました。
心行くまでループしてください！（笑）

A4.真堂圭さん

やり込み形なインフィニットループ。
各キャラクターに感情移入しながら、
何度も楽しめるのではないかと思います。
ぜひヴィーネにくっついて、
可愛い部分や可哀相な部分が色々ありますので見てください。
頑張ってください！

セレスティア編

「遅すぎた恋」

古城のテラスでティータイムに興じていたセレスティアは、もう何度目かさえわからないため息を吐いた。カップに満たされたハーブティに映る表情を見て、彼女はここしばらく笑っていないことに気付いた。
リゼーブルグ国王の崩御から数ヶ月が経ち、若きウィリアム王子の世継ぎが城内外で期待されていた。彼が王となる条件は、婚儀によって妃を娶ること。すでに隣国の姫であるセレスティアが、国家間の戦争回避と経済的支援を約束する政略結婚相手として輿入れしていたが、未だ婚儀には至っていない。それどころか、初対面のウィリアムに、本人とは知らず「ウィリアム様はどんな御方？」と尋ねて笑われて以来、セレスティアは彼とまともに会話を交わしたことさえなかった。
「セレス様、今日はローズティをご用意しました。何でも美肌効果があるらしいですよ？」
「……そう、ありがとう。とってもおいしいわ」
少々ふくよかで母性的な給仕メイドのアイシャが、セレスティアの冷めたカップを手際よく取り換える。手持ち無沙汰のセレスティアは、遥か遠くにかすむ故郷の隣国をぼんやりと眺めていた。
「まだ、ご決心は固まりませんか？」
新しくローズティを注ぎ終わったアイシャが、子をあやすような穏やかな口調で聞いた。
「……ごめんなさい。王家も民も皆、ウィル様の王位継承を心待ちにしているというのに。わたくしのワガママで先送りにしてしまって……」
「いえいえ！　こちらこそ、ただの使用人が出過ぎたことを聞いてしまって申し訳ありません。セレス様を困らせるつもりはなくて……」
「ええ、わかっているわ。……わたくしも、いつまでもウィル様のご厚意に甘えていられないことはわかっているつもりなのよ」
婚儀の延期はセレスティアが進言したものではない。婚儀への準備になぜか後ろ向きなセレスティアを気遣ってか、ウィリアムが彼女の決心がつくまで待つと言ったのだ。セレスティアはその言葉を拠り所にして、無為に時を過ごしていた。
うつむくセレスティアを励ますようにアイシャが笑顔で話した。
「ウィリアム様は先王様に負けないくらい立派で素晴らしいお方ですよ」
「……そうね。温和で優しくて頼りがいがある。非の打ちどころがないお方と聞いています。でも……」
「でも？」
アイシャの脇をすり抜けるようにして立ちあがったセレスティアは、振り返ることもせず口を開いた。
「……庭園を歩いてきます。少しの間、一人にしてください」
「え？　あ、はい……」
言いかけた答えをもらえないまま、アイシャはテラスから出ていくセレスティアを見送った。
部屋から出たセレスティアは、先ほど喉まで出ていた言葉を反芻していた。

『でも、怖い……怖いの……』
父王に言われるがままリゼーブルグにやってきた彼女だったが、おそらく生涯を決めるであろう政略結婚は、恐怖以外の何物でもなかった。
だが、そんな理由をメイドに告げるわけにもいかない。
セレスティアは出てきた扉に背中を預けながら、幾度とも知れないため息をまた吐いた。

※　※　※

歩調も緩やかにセレスティアは広間に続く廊下を歩いていた。壁には庶民が一生働いても手に入らないであろう優麗な絵画が連々と飾られていたが、婚儀のことで頭を悩ませている彼女はそれを楽しむ余裕はなかった。
最近になって城内では流行り病が蔓延している。病を恐れて、多くの給仕たちが辞めていったせいか、すれ違う人も疎らだ。そんな静かな廊下だからこそ、かすかに聞こえる話し声がセレスティアの耳に入った。
声はちょうどメイドたちの控室から漏れていた。盗み聞きをするつもりはなかったが、話題に自分の名が上ると、意思とは裏腹に足が止まる。
「セレス様って、いつになったら婚儀をされるんだろう?」
「そうよねぇ、ウィリアム様のどこがご不満なのか理解できないわ」
「どうせ逆らえない政略結婚なんだから、さっさと済ませちゃえばいいのにね」
どうやらメイドは三人で、セレスティアへの嫉妬交じりの愚痴をこぼしているようだ。普段は決して聞くことはない本音を知り、セレスティアはわずかに唇を噛んだ。
『あ〜あ、あたし本気でウィリアム様狙っていたのになぁ〜』
「メアリって、掃除していても給仕のときでも『玉の輿〜、玉の輿〜』だったもんね」
「うっさいわね〜、それくらいの夢は見てもいいでしょ? よくお掃除中に声をかけてくださったから、脈ありと思っていたのよ。……あ〜あ、あたしもここのお仕事辞めちゃおっかなぁ」
セレスティアは今更ながらウィリアムの人徳に脱帽させられた。恐らく、使用人に対しても分け隔てなく接することができるのだろう。そんな王子との結婚が約束されている幸運をセレスティアは改めて諭されたように思えた。
だが、それと同時に胸の奥でくすぶっていた恐怖心の源が顔を出してくる。
『ウィル様がわたくしなどを心から愛してくださるの?』
国益のために政略結婚を受けるのは、何もセレスティアだけではない。相手のウィリアムも同じなのだ。ましてウィリアムには王位継承のための婚儀というオマケもついている。箱入りで育ったセレスティアは、寵愛もされず、ただ着飾られた人形(ドール)のような存在になることを何より怖れていた。
「メアリ、まだ諦めるのは早いんじゃない? いくらウィリアム様がお優しい人だからって、これだけじらされたら愛想を尽かすかもしれないよ」
「そうそう、政略結婚さえ反故にして、新しい相手を探すかもしれないじゃん」
「てゆーか、ウィリアム様って本当はセレス様を妃にする気ないんじゃない? 好意があるなら黙って待ってたりしないよね?」
「あーそれあるかも!? ほらメアリ、頑張りなよ、応援するからね!」
「玉の輿、復活? うん、なんか元気出てきた!」
セレスティアは電流が走ったような衝撃を受けた。自己の思い込みより、他者の

感想の方がこれほど胸に突き刺さるものとは知らなかった。

確かにウィリアム本人がセレスティアに婚儀を迫ることは、今までにただの一度もなかった。それはメイドたちが噂する通りの理由なのか、それとも誤解なのか。

わだかまりは歩みを止めたセレスティアの背中を強く押していた。

※　※　※

リゼーブルグに輿入れして以来、これだけ必死に歩いたことはあっただろうか？

セレスティアは自分でも信じられないくらいの歩調で広間に出ていた。

ウィリアムの気持ちを確かめること。その答えによっては、婚儀に対する恐怖を払拭するきっかけになるかもしれない。

そんな彼女の目には、前から来る重々しい鎧を纏った大男さえ映っていなかった。

「きゃっ……」

「おおっと、……こ、これは大変失礼いたしました。セレスティア様、お怪我はございませんか？」

倒れる寸前のところで武骨な腕に支えられたセレスティアは、立ち上がってあたふたと身なりを整えた。

「ごめんなさい、ジミーさん。わたくしとしたことが、はしたなくぶつかってしまって……」

ニックネームで呼ばれたのが嬉しかったのか、衛兵のジミーは頬を赤らめながら鼻の頭を掻いた。

「いえいえ、ご無事で何よりです。それよりもお急ぎのご様子でしたが、いかがされましたか？」

「……少し、ウィリアム様にお話がありまして、お部屋を訪ねようと」

「そ、それでは、とうとう婚儀のご決断をされたのですか!?」

色めきたったジミーは鼻息を荒くしてセレスティアに顔を近づけた。セレスティアは反射的に目を丸くしながら後退る。

「いえ、違います……」

「……そうですか。でも、あいにくですが、ウィリアム様は外出中ですよ。そろそろ戻られる時間ではありますが」

「そう……、わざわざ教えていただいて、ありがとうございます」

身分の高い御方にお礼を言われることに慣れていないジミーは、落ち着かない笑顔で頭を掻いた。

「そ、それでは、わたしはこれで。城門での来客対応をサボっている不届きメイドを連れてこなければいけないので……」

直立姿勢で深々とお辞儀をしたジミーは、ガシャガシャと鎧を響かせながら広間の奥に消えていった。

セレスティアは悩んだ。ウィリアムの戻りを待ってから部屋を訪ねることもできる。でも、一刻も早い“答え”を求めた彼女は、自然とその足を城門へと向けていた。

※　※　※

メイドの姿がなかった。先ほどまで警備をしていたミーが、担当メイドのメアリを引っ張ってくるために持ち場を離れていたためだ。おかげでセレスティアは誰に見咎められるわけでもなく、ウィリアムの帰りを待つことができた。

どうやって話を切り出そうかと考えていたセレスティアは、城門を三人の男がキョロキョロと落ち着かない様子で入ってくるのを確認した。

「どうしましょう？　応対するメイドがいないから困ってらっしゃるのかしら？」

セレスティアは持ち前の親切心で、彼らに近寄っていった。

男たちの身なりは、とても王族や貴族に縁があるような感じではなかった。擦り切れて穴のあいた衣装はもう何日も洗った様子はなく、髪も髭も伸ばし放題。衛兵が一見すれば、即座に退去させられる出で立ちだ。

そんな浮浪人とも呼べる男たちは、無垢な表情で近づいてくるセレスティアを見つけて、ニヤリと下卑な笑みを浮かべた。

「申し訳ございません。応対のメイドが不在にしておりまして」

客人に失礼があっては王族の恥と思い、セレスティアは一風変わった男たちに対しても礼節を重んじた。

「……よく見ると、衛兵の姿もないようだが？」

長身で狡猾そうな顔立ちの男が澄ました所作でセレスティアに訊いた。

「お恥ずかしいお話ですが、城内での流行り病によりまして、衛兵の数も減り、先刻まで警備をしていた衛兵も所用で場を離れているところでございます」

「なるほど……それは都合がいい」

「え？　……ふぐっ!?」

口を手で塞いでいた。汗ばんだ体臭がセレスティアの鼻をつく。

長身の男は、目を見開いて驚くセレスティアを見て、声を殺しながらほくそ笑んだ。

「くくっ……死罪覚悟で盗みを働いてやろうと思ったが、まさかこうも上手くいくとはね」

その言葉を聞いて、セレスティアはようやく相手が不埒者であることを悟った。

しかし、逃れようと身体を捻じっても、男の太い腕を振りほどくことはできない。次期王妃である彼女ができた僅かな抵抗は、目の前の長身の男を毅然と睨むことだけだった。

「いやぁ、見れば見るほど上品なお顔立ちだこと」

もう一人の小柄な男が、セレスティアの顔を下から覗き込むように見つめる。それでもセレスティアは視線を変えずに目の前の長身の男を睨み続けた。そんな態度が癇に障ったのか、長身の男の顔から笑みが消えた。

「おやおや、自分の置かれた状況がまだ理解できていないようだ」

男は懐に手を入れながら、ゆっくりとセレスティアに近づいていく。

「あんたの身につけている宝飾品一つで、俺たちが一生かかっても使い切れない金が転がり込む。命乞いして差し出せば、助かる可能性だってあるかもしれないぞ?」

セレスティアの抵抗する瞳は衰えない。顔を見られた男たちが自分を無事に解放するとは思えなかった。

小さく舌打ちした長身の男は、懐から小さな瓶を取り出して、セレスティアの目の前で開けて見せた。鼻を覆いたくなるような刺激臭が立ち込める。

「これはな、俺たちのような、明日の食い物さえままならない腐れ庶民の拠り所さ。少しでも飲み込めば、長く苦しまずにあの世へ行ける、いわば最後の慈悲だ」
男は再び瓶に蓋をして、セレスティアの頬にペチペチと当てた。
「あんたを気絶させた後、俺たちはそのティアラをいただく。そして、あんたの口にこの毒液を流し込んでおいてやるよ。運よく目覚めることがあっても、喉が開いた瞬間に死ぬ。流行り病の突然死にみせかけられて丁度いい。面白い筋書きだろう？」
そこまで聞いたセレスティアは、ゆるりと瞳を閉じた。
……悔しい。
抗うこともできずに死ぬのが悔しい。
自分の甘えで婚儀を延ばしたまま逝くのが悔しい。
何より、ウィリアムの気持ちを知らずして終わることが悔しかった。
小太りの男は、セレスティアの身体から力が抜けるのを感じて観念したと思ったのか、口元を塞いでいた手を緩めた。そしてそれは、セレスティアの悲痛な叫びと同時だった。
「ウィル様～～～～!!」
声が届いたのか。想いが伝わったのか。
次の瞬間、一頭の白馬が稲妻のように城門に飛び込んできた。
その背に乗った主は、いつもの温和な表情とは違う鋭い目つきで男どもを捉えると、威嚇するように馬を立ち上がらせた。それに呼応するように、城内から衛兵が続々とやってくる。
「く、くそっ！　まずい、殺されるぞ!!」
形勢逆転。男どもは、すくみ上がった身体をどうにか動かすと、悪足掻きに毒瓶をセレスティアに向けて投げ捨て、一目散に逃げ出していた。
くたりと膝を折ったセレスティアに、白馬から降りて駆け寄っていく人影があった。その待ち焦がれていた優しい声を聞いた彼女は、安堵の中で意識を失っていた。

※　※　※

それから数時間後、セレスティアは婚約者用の客間のベッドで目を覚ました。
窮地を切り抜けた彼女だったが、まだ身体の震えが止まらない。
「起きたのかい？　賊は追い払った。もう心配いらないよ」
セレスティアは驚いた。側にいたのはメイドのアイシャではなく、先ほど戻ってきたウィリアムだった。
「ウィル様……どうして……？」
「君の容体が気になってね。アイシャと代わってもらったのさ」
ウィリアムは穏やかな笑顔で、ベッドに横たわるセレスティアの頭を撫でた。
「……あの、ウィル様。このような格好で失礼とは存じますが、どうしてもお聞かせ願いたいことがございます」
幾分落ち着いたセレスティアは当初の目的を切り出した。ウィリアムは小首をかしげた仕草で「なんだい？」と尋ねた。
「なぜ、いつまでも婚儀を先送りにするわたくしを咎めないのですか？　それは、メイドたちが言うように、わたくしとの結婚がお嫌だからなのですか？　王位継承のために仕方なくわたくしを妃に選んだのですか？　わたくしを……」

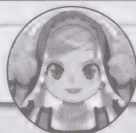
セレスティアは表情を曇らせずに嬉しそうに、だけど、一度聞きたかったのは唯一の質問だった。
「わたくしを本当に愛してくださるのですか?」
ウィリアムは表情を変えずに、ただ黙って聞いていた。そして、ゆっくりとその答えを口に出す。
「君との政略結婚は、わたしの王位継承に必要な儀式だということは否定できない。それが気になって婚儀を延ばされるのは良い話じゃないね」
愕然とするセレスティアに追い打ちをかけるように、ウィリアムは言った。
「この婚約は解消しよう」
きっとこれは罰なのだろう。
誰もが羨む相手との結婚を、わがままでずるずると先送りにしてきた罪。セレスティアはその報いを残酷に突きつけられたように思えた。
涙が溢れそうになった。今まで怖い怖いと逃げていたはずなのに、失って初めてウィリアムへの想いに気付かされたのだった。
けれど、ウィリアムはその罪をすべて許すように、セレスティアの手にそっと触れながら続けた。
「そんな悲しい顔をしないで。だから、改めて一人の男として、君との婚約を結ばせてもらえないかい? 国家同士の関係とか、王位継承のためとか、そんな瑣末なことは考えずに、……君を愛していきたいんだ」
「ウィル様……」
温かい太陽の匂いがする風が客間に吹き込んだ。
セレスティアはウィリアムの手を握り返しながら、忘れかけていた微笑みを取り戻していた。
「すぐに返事をしなくてもいい。先送りにされることは慣れているからね」
その屈託のない笑顔を見て、セレスティアの遅すぎた恋が始まった。
「いいえ、もうお待たせいたしません。セレスティアはウィル様とともに生きます」

メイドたちの とあるー日

こんにちは、アイシャです。
このページでは、わたしたちメイドが普段どのような仕事に携わっているのか、時間表でわかりやすく紹介しています。ご興味がありましたら、どうぞお目通し下さいね。

アイシャの場合

時刻	予定	コメント
〜6:00	起床	
6:00〜7:00	庭園の手入れ	花壇のお手入れは、わたしの日課です。ウィル様やセレス様もお花はお好きらしいですよ。
7:00〜8:00	ヴィーネ様起床の手伝い	ヴィーネ様は朝が弱いですから一苦労です。早くおねしょの癖も治してもらいたいですね。
8:00〜9:00	朝食&お茶用意	
9:00〜10:00	寝室のベッドメイク	
10:00〜11:00	ウィル様、セレス様のお部屋の掃除	
11:00	ティータイム	お昼前の一息の時間です。ついついお菓子を食べ過ぎてしまいます。
11:00〜12:00	ヴィーネ様のお部屋の掃除	
12:00〜13:00	昼食	
13:00〜15:00	広間の掃除(メアリの手伝い)	メアリの掃除を手伝いで、床拭きをしました。普段は王族の私室がわたしの掃除担当なんです。
15:00〜16:00	ヴィーネ様の教育	言葉遣いや女性としての立ち振る舞いをお教えます。文字の読み書きの授業をすることもありますね。
16:00〜16:30	ティータイム	
16:30〜18:00	廊下の掃除	
18:00〜19:00	ヴィーネ様と読書	お時間が空いたときは、ヴィーネ様と遊びます。読書をしたりボウリングをしたり、楽しいですよ。
19:00〜20:00	ボーっとする	この日はお仕事が早く終わってしまいました。お部屋でただボーっと座っていることもあるんです。
20:00〜21:00	夕食	
21:00〜22:00	夕食の後片付け	
22:00〜23:00	趣味の小説を書く	主役はウィル様でヒロインがわたしです。積極的なウィル様が交際を迫ってきて……キャッ♥
23:00〜0:00	就寝	

アイシャ、いつもお仕事ご苦労さま!
こう見ると、ヴィーネの相手をしてくれる時間が多いんだね。

わたしのような王族側の世話係メイドは、
お掃除や給仕の他にも家庭教師のような役割もあるんですよ。

メイドって常に仕事しているイメージがあると思うけど、
実は決まった仕事が終わってしまえば結構ヒマだったりするのよ。
まあ、あたしはサボりすぎかもしれないけどね。

メアリの場合

時刻	予定	コメント
	まだ夢の中……	一応あたしはアイシャの先輩だから、少しだけ長く休んでいられるワケよ。ホントよ!?
6:00	慌てて起床	
7:00	城門と庭園の掃除	毎日やっているから、そんなに汚れてないのよね。たまにコインとか落ちていて、得したりするわ。
8:00	朝食	
9:00	来客対応	
10:00	噂話収集タイム!	本当は客間の掃除時間なんだけど、他のメイドから金持ち貴族の噂を聞いてテンション上がったわ。
11:00	ティータイム!	
	続·噂話収集タイム!	本当は回廊の掃除時間なんだけど、噂の金持ち貴族が実は男好きらしくてテンション下がったわ。
12:00	昼食	
13:00		
14:00	広間の掃除	アイシャが手伝ってくれたから、すぐに終わったわ。いい子よねアイシャ。お嫁さんにしたいわね。
15:00	客人と噂話	
16:00	ティータイム!	
17:00	衛兵詰所でジミーに仕事の愚痴をこぼす	流行り病を怖がるメイドがどんどん辞めていって、仕事がバカみたいに多いのよ。溜め息出るわ。
18:00	お食事の準備	
19:00	ご主人&客人の給仕	まあ簡単に言うと、ウェイトレスみたいな仕事ね。今日はお皿を1枚しか割らなかった。Good job!
20:00	夕食	
21:00	夕食の後片付け	
22:00	メイド仲間とオトナの会話	男と女のディープな夜の話が中心ね。あたしはもっぱら聞き役だけど、みんなスゴイわよ。
23:00	就寝	
0:00		

メアリってば全然お仕事していないじゃない!
真面目に働かないと、お兄さまに言いつけて減給にしちゃうんだからね!

ヴィーネ様!?
そんなぁ〜〜、あたしなりに頑張っているつもりだったのにぃ〜!

ヴィーネ編

「はじめてのプレゼント」

朝食を終えて私室に戻ったヴィーネは、背丈の倍はある書棚とにらめっこをしていた。

いろいろな知識を身につければ、いつかきっと兄ウィリアムの役に立てるはずと考えた彼女は、読書が日課に近い趣味になっていた。

書棚には王国の歴史書から幼児向けの絵本の類まで、幅広いジャンルの書物が収められている。もっとも、難解な学術書などは数ページ読まれただけで、ほとんど開かれることはない。それでも『読んだことがある』という事実が、まだ幼いヴィーネにとって大きな自慢だったりする。

「えっと、『デキる淑女の身だしなみ』は昨日読んだし……、『簡単！人心掌握会話術』は使ってみたけどあんまり効果なかったし……」

背表紙を指で追っていたヴィーネは、まだ目を通していないタイトルを見つけて手を伸ばした。

「『大人のたしなみ　対人関係編』！　これにしよう！　ヴィーネはもう大人なんだから、知らない大人のマナーとかがあったら恥ずかしいもんね」

厚みのあるマナー本を取り出したヴィーネは、本棚を背にして床にちょこんと腰を落とした。以前は机に向かって本を読んでいたこともあったが、だんだん面倒になって、その場に座り込むようになっていた。

「ヴィーネ様、寝具のお取り換えが終わりました」

ちょうどそこにやってきたのは、濡れたシーツを抱えたアイシャだった。本を開こうとしていたヴィーネは、昨夜、ベッドで粗相をしてしまったことを思い出して顔を赤めた。

「アイシャ！　……えっと、おねしょしちゃったことなんだけど……」

「分かっています。ウィル様には内緒にしますから」

「あ……うん！」

気まずそうな表情が、一転花が咲いたような笑顔になる。ウィリアムにまだおねしょが治らないお子様だと知られるのは、オトナなヴィーネにとって何より耐えがたいことだった。

「これからは、ご就寝される前に、用を足しておきましょう」

アイシャはヴィーネの目線まで腰を下ろすと、穏やかな口調で注意した。

「……わ、わかっているもん！」

「夜におひとりでお部屋を出るのが嫌でしたら、わたしがご一緒させていただきますよ？」

「へ、へーきだもん！」

「わかりました。もし、お考えが変わるようでしたらお申し付けください。アイシャはいつでもヴィーネ様にお付き合いしますから」

そういうと、アイシャはシーツを抱えなおして、部屋から出て行った。その様子を見届けたヴィーネは、膝に抱えていた本に目を落とした。

小さい頃からアイシャには身の回りの世話をしてもらっていて、それが当たり前のように育ってきた。だからなのかもしれない。ヴィーネはまだ一度もアイシャに対して、感謝の言葉をかけた記憶がない。

何時にあっても礼儀を忘れないウィリアムを見てきたヴィーネは、その大切さをよく知っていたが、いざとなるとなかなか口にするタイミングを掴めなかった。

「こんなときこそ、ご本が役に立ってくれたらいいんだけど……」

何気なくページをめくったヴィーネは、そこに書かれている一つの内容に目を奪われた。それは、ごく短く数行で紹介されていたものだったが、今のヴィーネには天啓とさえ感じられた。

「よ～し！　待っていてね、アイシャ！」

ヴィーネは開いた本を片付けることも忘れて、部屋から飛び出していった。

※　　　※　　　※

城下の商店街はお世辞にも活気はなかった。ぽつりぽつりと軒を連ねる露店に、数人のひやかし客が物欲しそうな視線を送っているのみ。店側も半ば商売を諦めたような物腰で、精力的に声を出して売り捌こうという気概はまるでない。

リゼーブルグ王国は、城内こそ裕福に見えるが、ひとたび城下に出れば目にも明らかな貧困層の吹きだまりだった。路地裏を覗けば、生死の判断さえつかない浮浪者たちが、身体を痙攣させながら横たわっている。

そんな小汚い街中を、一国の姫であるヴィーネが衛兵のジミーと使用人のメアリを連れて歩いていた。もちろん、三人とも目立たないように城下の民に見える衣服を身につけている。最初はメアリのお下がりに不満がっていたヴィーネだったが、城を出てからは初めて見る外の世界に興味が移ったようで、ジミーの服の裾をきゅっと握りしめながら、キョロキョロと辺りを見回していた。

「ところで姫様は、なぜ城下に出ようと思われたのですか？」

ヴィーネに合わせてゆっくりと歩いていたジミーが、思い出したように尋ねた。

「アイシャに『気配りのこもったプレゼント』を買ってあげるためよ」

視線を上げずにヴィーネは答えた。よほど街の様子が珍しいらしい。

それを聞いてジミーは少なからず驚いた。使用人が王族から施しを受けるためには、並外れた功績を上げなければならない。ジミーの父親も立派な衛兵であるが、それでも特別視されるほどの武勲を残したことはなかった。

面喰っているジミーを見上げたメアリは、呆れたような仕草で両手を広げた。

「ジミーさんってば、何も聞かないでついてきたんですか？　ヴィーネ様は、日頃世話を焼いてくれるアイシャに贈り物をされたいんだって。何でもそれが『大人のたしなみ』らしいですよ？」

「……はぁ、よくわからないが、そういうものなのか？」

「どうなんでしょうね？　……でも、もうすぐアイシャの誕生日だから、多分そのプレゼントをお買いになられるってことだと思うけど」

「なるほど、姫様からプレゼントを頂けるなんて、アイシャは果報者だなぁ……」

羨ましすぎて涙目になっているジミーをよそに、メアリは取り繕ったような笑顔でヴィーネに質問した。

「それで、ヴィーネ様はアイシャに何をプレゼントされるんでしょうか？」

ヴィーネはピタリと歩みを止めて、「う～ん」と唸った。

「……考えてなかった」

とにかく気配りのこもったプレゼントを贈ることだけを考えて王城から抜け出し

てきたヴィーネは、肝心の購入する商品のことが頭からすっぽりと抜けていた。
「そうですか……困りましたね、どうしましょうね」
仕事の最中に半ば強制的に引っ張り出されてきたメアリは、思慮が浅いヴィーネを叱りたい気持ちをぐっと押えて、笑顔を引きつらせた。
しばらく腕を組みながら考え込んでいたヴィーネだったが、答えを待っているジミーとメアリを見上げて何かをひらめいた様子で両手を叩いた。
「そうだ！　メアリとジミーって、アイシャと仲がよかったよね？」
「え？　……ええ、一緒にお仕事していますし、友達といえばそうですね」
「城門で警備をしている自分も、よく庭園に出てくるアイシャと話をしますよ」
メアリとジミーは顔を見合せて首を傾げた後、順番に答えた。二人ともアイシャと仲がいいことは確かだった。
「だったら、アイシャが何をプレゼントしたら喜んでくれるか教えてくれるよね？」
ヴィーネは期待に瞳を輝かせた。その眼差しに二人は少し怯んだように身体を反らす。
メアリは何か答えろと促すようにジミーを肘で小突いた。ジミーは唸りながらアイシャが欲しがりそうなものを記憶の中から必死に絞り出していた。
「……な、何となくですが、姫様の食事を分けて差し上げたら喜ぶのではないでしょうか？」
「ヴィーネの食事？」
「はい。よく美味しそうだって羨ましがっていましたから……」
言いながら、案外的を射ているのではと思っていたジミーだったが、横からメアリが間髪入れずに口を挟んだ。
「ちょっとジミーさん、そりゃあの子食いしん坊だから喜ぶかもしれないけど、誕生日プレゼントってそういうものじゃないと思いますけど？」
「そうかもしれないが、他に思いつかないんだから仕方がないだろ？」
「……何それ、そんなんじゃ、一生モテないですよ？」
「うぐっ……」
ジミーは返す言葉も見つからず、身体をセメントで固められたように硬直させた。女性と交際したことがないジミーにとって、“モテない”は禁句だった。あまりにリアルすぎる。
「そ、それならキミは、どんなプレゼントがいいと思うんだ？」
崩れ落ちそうになる気持ちをどうにか持ち直して、ジミーはメアリに問いかけた。
成り行きを見守っていたヴィーネもメアリの言葉を待っていた。
「……そうですねぇ、衣装とか下着なんてどうですか？」
「下着で喜ぶの？」
小首を傾げるヴィーネの前に、メアリがしゃがんだ。ジミーは反応に困ったのか目をそらして鼻頭を掻いていた。
「はい。朝の着替えのときに、最近腰回りがきつくなった、とか言っていましたから、ちょうどいいと思いますよ？」
メアリは今朝偶然アイシャと起床時間が合い、身支度を一緒に行っていた。まさかそのときの雑談が役立つとは思っていなかったメアリは、少し得意げになっていた。

欲しいと思っているに決まっていますよ。身体のラインに密着する感じのセクシーなやつがいいですね」

だんだん暴走気味になっていくメアリの説明に、ヴィーネはあまり想像がつかないのか、ポカンとした表情だった。

「セクシーな下着……」

対照的に、ジミーは頭の中では、ベッドの上でぴちぴちの下着を身にまといながらウィンクをするアイシャがはっきりと形作られていた。

「あの子の白い肌には、やっぱり黒が映えますよね」

「そうだな、黒が最高だ」

鼻の下が緩んでいたジミーは、不覚にも大きく頷いてしまった。それを聞いたメアリは立ち上がりながらジミーを細い目で見上げていた。

「……ジミーさん?」

「あ、いや! 自分も下着は黒を愛用しているんだ。今も黒のパンツを履いていてな。だから、その……なんだ、決してやましい意味で言ったわけじゃないぞ!」

メアリの冷ややかな視線にジミーは目を合わすことができず、乾いた笑いで向えた。ジミーの背中には、緊張からくる変な汗が伝っていた。

「……そーよね。誠実が取り柄のジミーさんが、エロオヤジみたいなこと言うから少し疑っちゃったわ」

日頃の行いが功を奏したのか、メアリはあっけなく納得していた。

微妙な評価にジミーの心中は複雑だったが、噂好きのメアリに『ジミーはむっつりスケベ』などと広められるよりは数倍マシだ。そんなことになれば、独り身がさ

「ささ、ヴァネッサ様、早速買いに行きましょう。何ならあたしが選んで差し上げますよ?」

メアリは衣装屋へ向かおうとしたが、後をついてくるはずのヴィーネの足は止まったままだ。

「……メアリはアイシャの下着の大きさ、わかるの?」

「大きさ? サイズですか……あたしより太いのは確かですけど……」

明確な回答ができずに気まずくなったメアリは、ヴィーネから目を外して「あはは」と惚けていた。ヴィーネとジミーは顔を見合せて肩を落とした。

“これは”という商品が思いつかないまま、結局三人は廃れた商店街の端まで来てしまった。半ば途方に暮れていたヴィーネは、一軒の古めいた看板を見つけて声を上げた。

「あ……、そうだ!」

何を思いついたのか、ヴィーネはジミーとメアリを置いて店に駆け寄っていく。

「姫様! お一人では危ないですよ! 自分も一緒に……」

「いーの! ヴィーネが選ぶんだから、二人はそこで待ってて!」

慌てて後を追おうとしたジミーを制して、ヴィーネは店内に消えていった。

もし非常事態になったら命に代えてもヴィーネを守る覚悟で城から出てきたジミーは、自分の視界にヴィーネがいないことに気が気ではなかった。まるで、長時間おあずけをされた犬のようにそわそわと落ち着かない様子だった。

一方のメアリは、ヴィーネが側にいるときには決して見せない仏頂面で腕組みし

ながら待っていた。本来であれば、今頃来客する貴族の給仕をしていたはずだ。そちらの方が、玉の輿を夢見るメアリにとってやりがいのある仕事だったが、当てが外れてしまった。

「何を買う気かしらね？」

「さあな？　姫様には何かお考えがあるのだろう」

言葉少なめにしばらく待つと、店からヴィーネが満面の笑顔で出てきた。購入した品物は、衣装の後ろに隠しているようで、お腹のあたりが少し膨らんでいる。

「目当てのものは見つかりましたか？　姫様」

「うん！　ジミーとメアリが教えてくれたことも参考にして選んだんだよ」

「そうですか、あんな程度で参考になったなら光栄です。なあ、メアリ」

メアリは二人のやりとりをよそにポケットから懐中時計を取り出して固まっていた。

「のんびりしている時間はなさそうよ……、急がないと城門が閉まっちゃうわ」

「え？」

気づけば、そろそろ西の空が茜に染まる頃だった。

いくらヴィーネの付き添いだったとはいえ、年端のいかない一国の姫君を日が暮れるまで外出させていたとあっては、衛兵として不名誉な評価を受ける可能性だってある。

「姫様！　自分の背中に乗ってください！」

「ジミー、どうしたの？　そんなに慌てて……」

状況がいまいち飲み込めていないヴィーネだったが、しゃがみこんだジミーの真剣な表情に負けて、その背に身体を預けた。

「全速力で行きますから、しっかり掴まっていてください！」

「う、うん！」

言うが早いか、ヴィーネをおぶったジミーはもと来た道を全力で引き返していた。

「ちょ、ちょっと置いていかないでよ～～!!」

メアリもその後を追いかけるようにして商店街を駆け抜けていった。

※　※　※

三人が城の敷地に戻ったときには、もう辺りが薄暗くなっていた。

降りかけた城門に滑り込むように入ってきたジミーは、ヴィーネを背中から降ろすと、四つん這いになって乱れた息を整えていた。遅れて到着したメアリも、動悸が激しい胸を押さえながらぺたりと座り込む。

一人元気なヴィーネは、だらしなく倒れる二人に何をしてあげればいいかわからず、その間を行ったり来たりしていた。

「ヴィーネ様～!!」

振り返ったヴィーネは、自分の名前を呼びながら庭園を走ってくるアイシャの姿を見つけた。ヴィーネの側まで来たアイシャは、今にも泣きそうな表情で抱きついていた。

「アイシャ？」

「……よかった。ご無事で本当によかった」

ヴィーネが内緒で城からいなくなったことに真っ先に気付いたのは世話係のアイ

シャだった。ヴィーネはアイシャが城内の隅から隅まで駆けまわって自分を探していたことを知る由もない。けれども、アイシャの様子がいつもと違うこと、そしてその原因は自分にあることだけは幼いヴィーネにもはっきりとわかった。

「……ごめんなさい。ヴィーネね、アイシャにプレゼントを買いたくて、お外に出ていたの」

「わたしに……プレゼント?」

「うん、毎日ヴィーネのためにお仕事してくれるアイシャに……、えっと……、ありがとうって……言いたくて……」

少し落ち着いたアイシャはゆっくりとヴィーネから身体を離すと、いつもの優しい笑顔を見せた。

「そのお言葉だけで十分すぎるほどですよ。アイシャはヴィーネ様の側にいて、ヴィーネ様が立派に成長していくお姿を見られるだけで、幸せだと思っているんですから」

ひたすらにまっすぐな好意を受け止めたヴィーネは、顔を赤くして照れ隠しにうつむいた。なかなか言えなかった『ありがとう』の言葉。ヴィーネはもっと早く伝えればよかったと思った。そうすれば、アイシャにいらない心配をかけることもなかっただろう。

「ありがとう、アイシャ!」

そう言って、今度はヴィーネがアイシャに抱きついた。

さんざん振り回されたジミーとメアリも、二人の様子を見て満足そうに頷いていた。

「……でも、ヴィーネの気配りがこもったプレゼントも受け取ってほしいな。ジミーとメアリからも色々教えてもらって選んだんだよ?」

「そうなんですか? ヴィーネ様からのプレゼントですもの。喜んで頂戴いたしますよ?」

ヴィーネは瞳を輝かせながら、衣装の後ろに隠していたプレゼントを取り出した。

「はい! 食いしん坊で、下着がきつくなって困っているって聞いたから、きっと役に立つと思うの!」

「え?」

無邪気な笑顔で差し出された一冊の本。それを受け取ったアイシャは、表紙のタイトルを見てワナワナと震えた。

「『今日から始める激ヤセ!エクササイズ』……、ふ……、うふふ、ありがとうございます。ヴィーネ様、大切にしますよ」

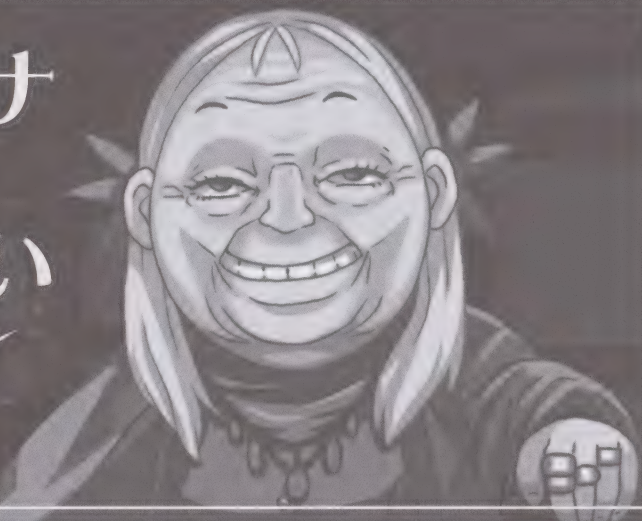
「よかった! 喜んでもらえて」

「ジミーさん、メアリ、後でお話がありますから、ちょっと待っていてくださいね♥」

こそこそと退散しようとしていたジミーとメアリは、ビクリと背筋を伸ばして固まっていた。

その日、ヴィーネはアイシャへの感謝の気持ちと、それを言葉にすることの大切さを改めて感じていた。

そして、ジミーとメアリはアイシャを怒らせると、意外に怖いことを初めて知ったのだった……

タチアナの運勢占い

占いのやり方

❶ まず、生年月日を西暦で確認して、それぞれを1桁の数字として考えて足し算をします。
例)2008年7月24日生まれの場合　2+0+0+8+0+7+2+4=23

❷ 求められた数字に、男性の場合は3を、女性の場合は7を足してください。
例)男性の場合　23+3=26

❸ 好きな数字をさらに足してください。
例)8が好きだった場合　26+8=34

❹ 出た数字の一の位があなたの数字となります。
例)34の場合　4

3　ラッキーキャラクター：セレスティア

仕事運　50

「何となく」仕事をしていないかい？生活の糧を得るには必要な行為だけど、目標を持って仕事をすると運気が上昇するヨ。

恋愛運　95

良い相手と巡り合える星の下に生まれているらしいねぇ。結婚は若いうちにするのがイイかもね？恋愛より見合いの方が向いているかもヨ。

金　運　70

真面目にコツコツと貯めるのがいいね。無駄遣いは厳禁。節制節約を心がけなヨ。ギャンブル運はないから、ラクして金を得ようとしないことだね。

4　ラッキーキャラクター：メアリ

仕事運　20

大成しにくいタイプだねぇ。努力次第だと思うけどね。サボり癖が出たり泣き言をいうようになったらお終いだヨ。仕事仲間を大切にするのが吉だね。

恋愛運　70

理想を高く持ちすぎたらいけないよ。
分相応って言葉があるからね。相手がいる場合も理想を押し付けるマネだけはやめた方がいいヨ。

金　運　60

思わぬ収入があるらしいヨ。道端で金を拾うことだってあるかもね。交番に届ければ少しだけ運気も上がるらしいけど……どうするかまでは関知しないヨ。

1　ラッキーキャラクター：ドレン

仕事運　65

上司や同僚の意見をしっかり聞く耳を持つのがいいヨ。優れた能力を持っていても、独りよがりじゃ上手くいかないからね。変な妬みを買う発言はいけないヨ。

恋愛運　55

モテていても、それに気付かないでチャンスを逃しているかもしれないねぇ。相手がいる場合は浮気に注意だヨ。

金　運　40

泥棒や窃盗に注意することだヨ。堅実に貯めた金を奪われる危険アリらしいね。貯蓄ばかりじゃなく、たまには贅沢に金を使うのもいいかもネ。

2　ラッキーキャラクター：ネルズ

仕事運　90

見切り発車でなく、熟慮を重ねた仕事の取り組み方が大切さね。人徳もあるから、大きな仕事が転がり込むほど出世するかもね。ただし、テングになったらいけないヨ。

恋愛運　30

恋愛が苦手なタイプだね。本気で恋をしようとする気持ちが大切だヨ？熱しやすく冷めやすい……相手ができてもすぐ別れるのはよくないねぇ。

金　運　75

計画性があって、散財しにくい傾向にあるらしいヨ？ホントかねぇ？借金をしたとたん運気が落ちるらしいから気をつけなヨ。

おやおや、
見慣れないお客さんだねぇ。
まあ、せっかく開いてくれたんだ、
ゆっくり見ていってお行き。
あたしが言うのもナンだけど、占いなんて
当たるも八卦当たらぬも八卦……
要は気の持ちようだヨ。

だから、良くない
結果でも落ち込んで
いちゃいけないよ？
前向きに考えるのが長生
きの秘訣ってもんさ。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

8 ラッキーキャラクター：ジミー

仕事運 80

良い方だけど、根詰めずに適度に息抜きをすると、さらに良くなるヨ。身体を動かす仕事が向いているかもネ。大器晩成型だから気長にやりなさい。

恋愛運 10

よかれと思ってやっていることが裏目に出ていたりするかもね。知らないうちに嫌われていることさえあるかもヨ。相手と会話をするだけで少しずつ運気回復。頑張りなヨ。

金　運 45

金に困ることはないようだけど、少しでも贅沢をすると運が落ちるね。あと、仕事をしないとさらに金運低下。「働かざる者食うべからず」だネ。

9 ラッキーキャラクター：ルケス

仕事運 70

世渡り上手で出世も早いかもしれないネ。あまりに仕事人間になり過ぎると運気が下がるから注意だヨ。何事もほどほどにすることだね。

恋愛運 15

恋愛成就は早いけど別れるのも早そうだね。自分の感情だけを押し付けすぎるとダメだヨ。ラッキーアイテムはとにかくプレゼント。思いやりが大事さね。

金　運 95

富裕になれる資質があるかもねぇ。この金運は仕事運と連動しているから、働き口次第でもあるけどね。人脈を広げれば金運もアップ。羨ましいねぇ。

0 ラッキーキャラクター：グラント

仕事運 40

他人に振り回されがちで、思うように仕事がはかどらないことはないかい？対人関係の悪化が運気の下降につながるヨ。あと、大勢で食事をすると運気が上がるヨ。

恋愛運 45

好きになってもなかなか相手に気付いてもらえない難儀な運勢だね。でも、強引だったり、その場の空気を読まない行動は良くないヨ。手紙を送ると運気がよくなるかもネ。

金　運 65

油断していると思わぬ出費がありそうだヨ。衝動買いは厳禁。必要だと思うものだけを揃えるのがいいね。ラッキーアイテムはメガネだヨ。

5 ラッキーキャラクター：ペリテ

仕事運 85

リーダーシップに長けていると出たね。人を使ったり、教育する仕事をするといいらしいヨ。でも、私情を仕事に持ち込むと運気が下がるから気をつけなヨ。

恋愛運 40

傷つくことが怖くて、思ったことを相手に伝えられないことはないかい？ギクシャクした関係が続きそうだね。疑心暗鬼はいけないヨ。

金　運 50

募金活動や無償奉仕をするといいらしいねぇ。「情けは人のためならず」ってヤツで、いいことをすれば報われるんじゃないかい？気の長い話かもしれないけどね。

6 ラッキーキャラクター：アイシャ

仕事運 75

可もなく不可もなくというところだね。良く言えば堅実、悪く言えば平凡。どう捉えるかは本人次第だヨ。後、事務仕事より接客業が向いているかもね。

恋愛運 60

慕われやすい性格だけど、恋人未満になりがちかもねぇ。見た目にも少し気を使うといいヨ。手作りのお弁当が恋愛運アップのアイテムだヨ。

金　運 55

倹約を心がけないと、すぐに金が飛ぶから気をつけなヨ。食費を抑えると金運上昇。でも、食事を抜くと逆に金運が下がるから、一日三食は守った方がいいね。

7 ラッキーキャラクター：ヴィーネ

仕事運 35

あまり人に頼り過ぎると仕事がうまくいかないようだヨ。イヤな仕事でも自発的に動けばいいことあるかもね。上から目線で会話をしなければ運気も回復するヨ。

恋愛運 65

好きになったら一直線のタイプだねぇ。でも、嫉妬深くもあって、相手を困らせることもあるかもね。少し距離を置くといいかもヨ。ラッキーアイテムは恋愛小説だヨ。

金　運 80

上昇機運があるね。宝くじやギャンブルで当たることもあるかもね。ただし、貪欲になり過ぎると運気が下降するから気をつけなヨ。

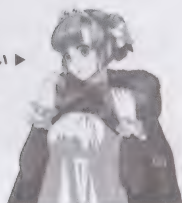
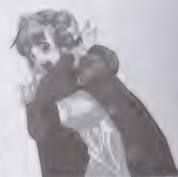
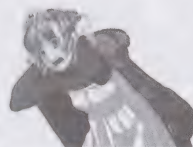
ウィリアム

デザイナーコメント

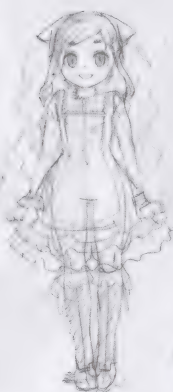
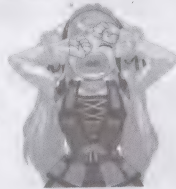
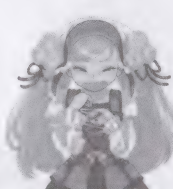
初期案はなんだか
王道SRPG
っぽいですね。

セレス

デザイナーコメント

髪型は羊から
イメージを得ました。

ヴィーネ

デザイナーコメント

当初は「お兄ちゃん」口調の妹のイメージ。

ネルズ

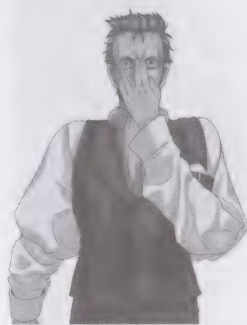
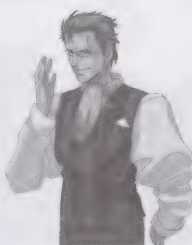
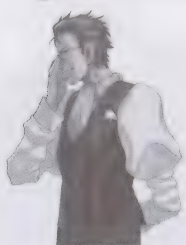
デザイナーコメント

特に悩まず。

グラント

デザイナーコメント

2稿目はなんだか鞭持って十字架投げそうな感じ。

ペリテ

アイシャ

デザイナーコメント 一昔前の少女漫画的快活娘風に描いた後、太目に。

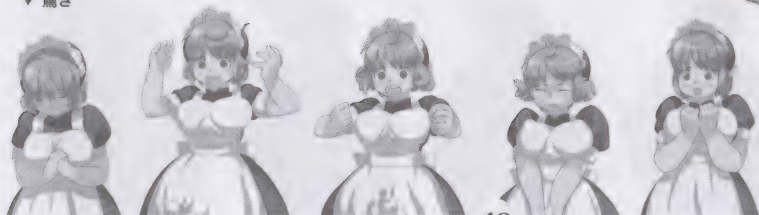
▼ 初期案

▲ 笑顔

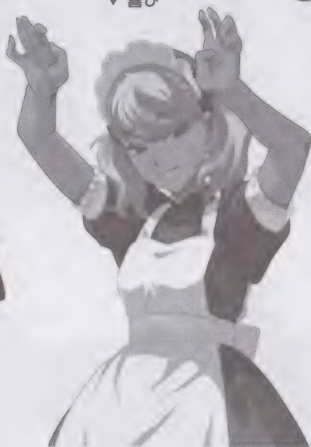
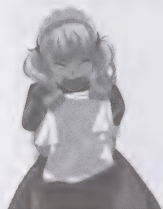
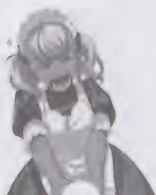
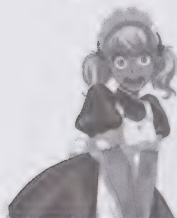
▲ 哀しみ

ラフ ▶

▲ 寝起き

▼ 驚き

メアリ

デザイナーコメント　初期案はキツネ目のアイドル声優さんのイメージ。

ジミー

デザイナーコメント

初期案ひどすぎ。

◀ 初期案

アイデアスケッチ ▶

◀ 笑顔

◀ ラフ

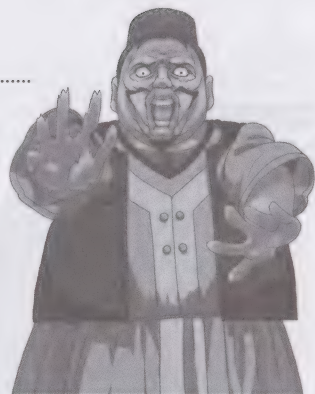
◀ 初期ラフ

▼ 怒り

寝起き ▶

ルケス

デザイナーコメント

初期案は好きな少女漫画のキャラから。

初期案 ▶

◀ 憤慨

狼狽 ▶

▲ 落ち込み

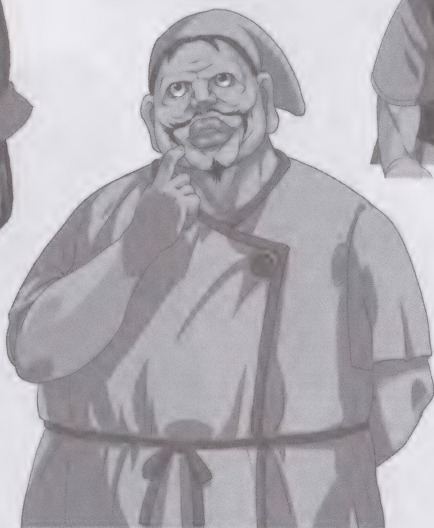
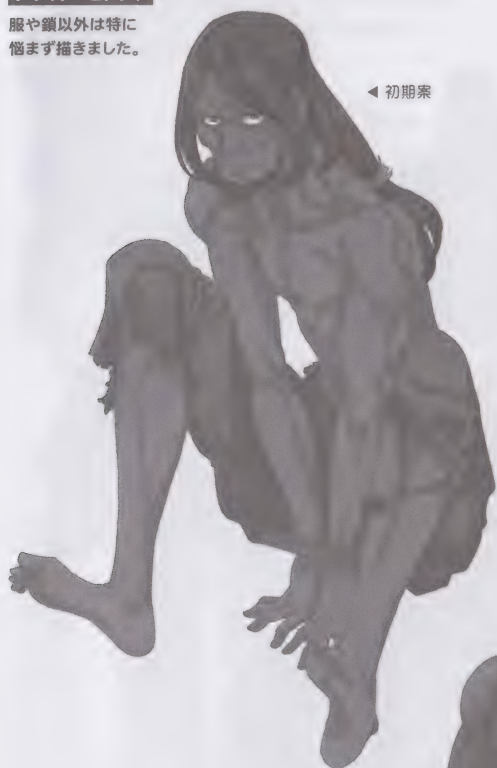
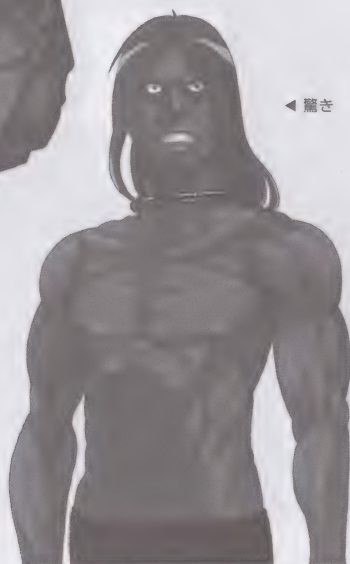
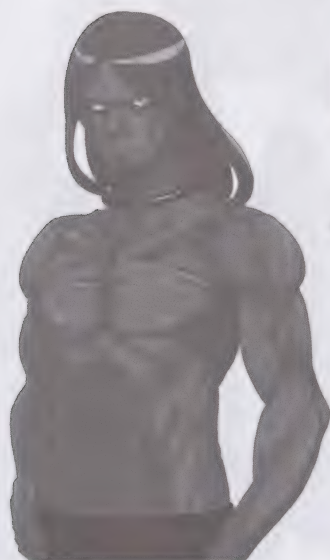
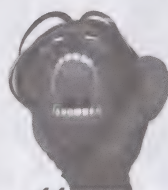
◀ 寝起き

▼ 初期ラフ

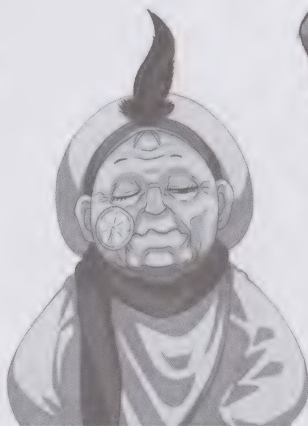
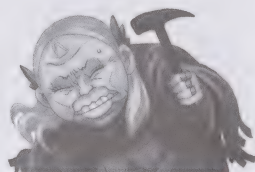
▼ 2稿ラフ

▼ 3稿ラフ

▼ ラフ

ドレン

タチアナ

デザイナーコメント

初期案は最近亡くした
自分の祖母から。

背景設定

リゼーブルグ城の概観

もともとは城壁と塔のみで、戦時用の兵舎がある程度だったが、
当時の最新建築様式による増築の末に、城を形成していった。
堀の水には、裏手を流れる川を利用している。
かつては跳ね上げ式の橋が架かっていたが、
現在は固定式の架け橋となり、城下をつないでいる。

ウィリアムの部屋

過度な装飾を好まないウィリアムは、
王族としては質素な部屋となっている。
中央に飾られた額には先王と王妃の
肖像画が描かれているのも特徴の一つ。

セレスの部屋

セレスティアは隣国からの客人でもあるので、
客間の一つを彼女用として開け渡している。
身一つで輿入れしてきたため、
彼女の私物は部屋には一切ない。

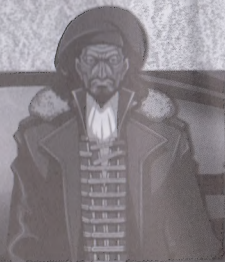
ヴィーネの部屋

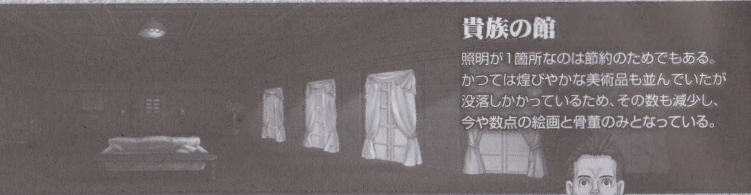
読書の趣味が高じて、書棚の数が多いのが
ヴィーネの部屋の大きな特徴である。
チェストに置かれたウサギのぬいぐるみは
7歳の誕生日にウィリアムから貰った物だ。

使用人の部屋

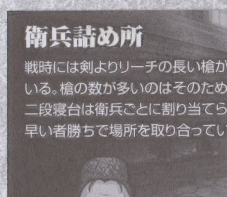
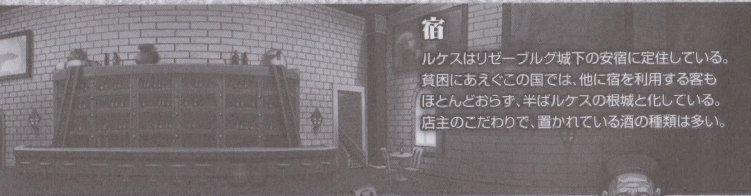
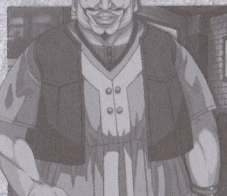
戦時に兵士の詰所だった部屋を改装している。
今はアイシャとメアリの二人だけが使用中。
入り口近くの棚の奥にはアイシャの小説が
隠されているが、実はメアリにはバレている。

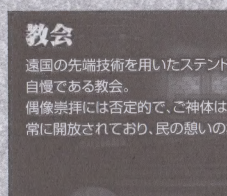
宰相執務室

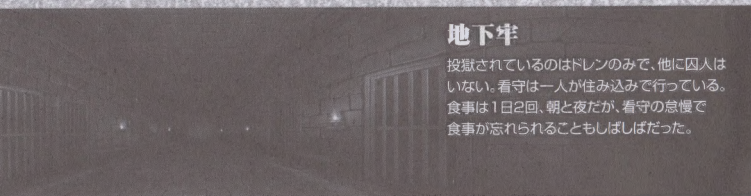
王国の政治を動かす宰相はほとんどの時間を
この部屋で過ごしている。
過去、騎士隊に所属し、武勲をあげた名残か
甲冑を誇らしげに飾っている。

貴族の館

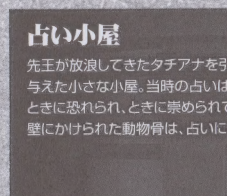
照明が1箇所なのは節約のためでもある。
かつては煌びやかな美術品も並んでいたが
没落しかかっているため、その数も減少し、
今や数点の絵画と骨董のみとなっている。

衛兵詰め所

戦時には剣よりリーチの長い槍がもてはやされて
いる。槍の数が多いのはそのためである。
二段寝台は衛兵ごとに割り当てられてはおらず、
早い者勝ちで場所を取り合っている。

宿

ルケスはリゼーブルグ城下の安宿に定住している。
貧困にあえぐこの国では、他に宿を利用する客も
ほとんどおらず、半ばルケスの根城と化している。
店主のこだわりで、置かれている酒の種類は多い。

教会

遠国の先端技術を用いたステンドグラスが唯一の
自慢である教会。
偶像崇拝には否定的で、ご神体は飾っていない。
常に開放されており、民の憩いの場になっている。

地下牢

投獄されているのはドレンのみで、他に囚人は
いない。看守は一人が住み込みで行っている。
食事は1日2回、朝と夜だが、看守の怠慢で
食事が忘れられることもしばしばだった。

占い小屋

先王が放浪してきたタチアナを引き止めるために
与えた小さな小屋。当時の占いは"魔術"とされ、
ときに恐れられ、ときに崇められていた。
壁にかけられた動物骨は、占いに使う薬品となる。

スタッフインタビュー

簗瀬涼司 ディレクター

このゲームの企画の大元を思いついたのが、お風呂の湯船につかって、ボヘ～っとしている最中だったのを思い出しました。
主人公も時代設定もまったく別物だったのに、あれよあれよと、王子とお城の物語になってしまいました。
そこからも大変だったのですが、関係者全員の力でなんとか出来たようです。
王子ウィリアムになって不思議な古城空間を憑依しまくっていただければと思います。
私は早く家に帰って、お風呂に入りたいです。

不破大輔 キャラクターデザイン

『デザイナーは二人っきり、追加スタッフは見込めず』…
こんな状態からデザイン作業はスタートしました。「8bit時代ならば当たり前だった事、むしろ全部作れて幸せ者!」と自分を騙し、背景の藤田氏を拝み倒し、なんとか完成に至る事が出来ました。
特にアニメに関してはゼロからの手探りでしたので、プレイヤーの皆さんに気に入っていただけるか心配です。
最後に、彩色を短期間とは言え手伝ってくれた第二開発の佐々木女史、彩色相談に乗ってくれた友人の井上氏に多謝。お二人が居なかったらと思うと…背筋に冷たい汗が…＾＾;

藤田晃生 デザイナー

今回、初めて360度見渡せる背景の作成という事で、その作り方をどうするかが悩みのポイントでしたが、周りの方の協力もあり、結果的に回しても違和感の無いものになっていると思います。
また、ゲーム中にスティック操作をしていただくと通常の背景視点では見えない範囲まで見ることができます。
意外なものが見えない部分に隠れているかもしれませんので、色々触りながら遊んでみてください。

井上恵一 営業

「インフィニットループ　～古城が見せた夢～」をお買い上げいただきまして、ありがとうございました。
思えば、この冊子を企画したのが2007年の12月頃。
かなり以前から立ち上がっていたのですが……
紙面の内容が決まったのは2008年5月の段階だったりします。
それから泣きそうになりながらも急ピッチで製作しました。
特にショートショートはゲーム中でも語られていないエピソードなので、楽しんでいただけたならこれ幸いでございます。

篠田好美 DTPデザイン

みなさん、この『インフィニットループ　レアブック』はいかがだったでしょうか?最初CD付きの分厚い豪華設定資料集を作ると井上君に言われた時は死亡フラグを予感しましたが、なんとか完成までこぎ着けました。出来上がってみれば漫画有り・小説有り・設定からイラストから小ネタまで、かなり豪華な内容になっております。この本はもちろん、ゲームの取扱説明書も、ぜひご一読いただき、『インフィニットループ』の世界に、さらにさらにハマっていただけたらと思います。

佐橋直幸 WEBデザイン

今回WEBデザインにあたり、イメージは「豪華で高貴な感じ」「ネガティブな暗さでなく厳かで清閑、ミステリアスな暗さ」でお願いね、というお告げを頂きました。主人公が幽霊ということで、メニューには白いモヤ(霊魂をイメージ)を追加してみたり、「インフィニットループ」ということでキャラクター説明画面をループ仕様にしてみたりと、試行錯誤しながら色々やってみたつもりです。
流行り神祭り、明るいサイトよりも暗いサイトを作る方が好きなので楽しんで出来ました。そんなWEBサイトからゲームのイメージを少しでも感じて頂けたなら感無量です。

Infiniteloop Rarebook インフィニットループ レアブック

発行年月日　2008年7月24日
表紙イラスト　不破大輔
印　　刷　図書印刷株式会社
企画・制作　株式会社日本一ソフトウェア